

地方自治体・大学間連携プロジェクトの意義と成果

—インバウンド対策に向けた鹿児島国際大学と西之表市の連携プロジェクト—

祖慶 壽子*

1. はじめに

鹿児島国際大学では2017年度より地方自治体と連携したプロジェクトがゼミ単位で開始された。その制度のもと祖慶ゼミは西之表市の経済観光課とプロジェクトを行うことになった。地方自治体としても第三者の意見を聞く機会となり、ゼミ学生にとっても社会の仕組みを知る良い機会となった。同市の経済観光課ではインバウンドに関して課題を抱えていたことから、海外から、特に中国からの観光客の増加が予想される中、現在の小規模な商店街である西之表市がどう対応すべきかが近々の課題であった。

2. プロジェクトの目的

上記のように両者はそれぞれの目的で、プロジェクトを始めた。

- ①西之表市の目的は、大学生が市街地での体験で得たコメントにより市街地の外国人受け入れ態勢の不備を知ることにあつた。
- ②大学側の目的としては、学生時代に社会における実際の課題を自治体の取り組みに関わることにより、自ら体験し、その後の進路への参考にすること、また、その体験により大学での学習が机上の学問ではなく、社会と繋がっているものであるとの認識をすることにあつた。

3. プロジェクトの背景

上述のプロジェクトは政府の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC）」に基づき行われたものである。「文部科学省では、平成27年度から、大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先の創出をするとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取組を支援することで、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的として「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」を実施」とホームページ上で述べた。

本学のホームページには、本学は2015年11月17日、産学官地域連携センター内に「COC推進室」を設置し、開所式を行い、文部科学省の平成27年度「地（知）の拠点大学による地方創生事業（略称COC+）」について、鹿児島大学を申請校、鹿児島国際大学ほか6校が参加する事業計画が採択され、これに関連して本学独自の取り組みとして同時に申請した「フィールドワークをベースにした地域が求める人材育成プログラム」が、地方創生の推進において特に優れた取り組みとして文科省から認められ、「地（知）の拠

キーワード：インバウンド、プロジェクト、学生、地方自治体、大学、連携

*本学国際文化学部教授

点 (COC 大学)」として認定された、とある。

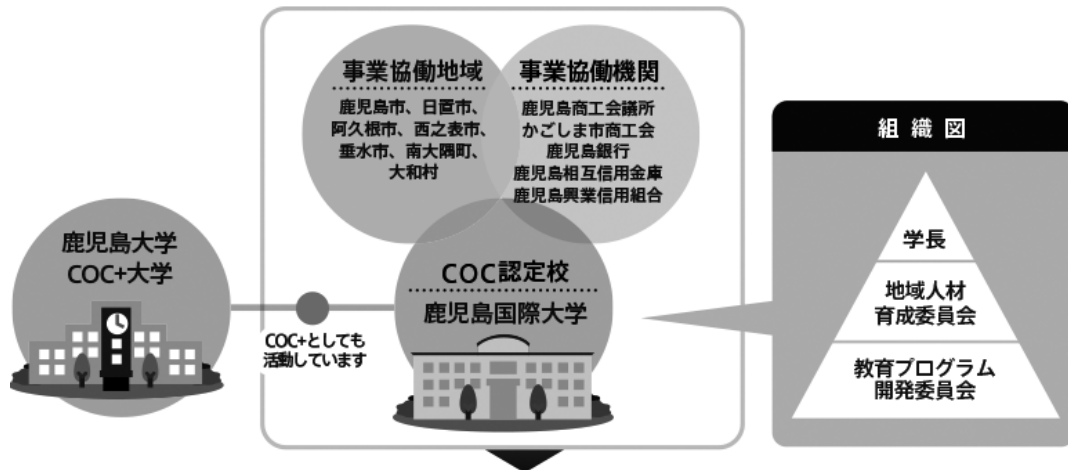


図1 鹿児島国際大学のCOCへの取り組み

出所：鹿児島国際大学のホームページより

その取り組みは、西之表市による「高等教育機関を活用した地域活性化に関する研究」にも次のように記されている。連携の今後の可能性として「大学の社会貢献が新たな役割として位置づけられ、地方自治体と大学との連携が進んでいる。連携の手段や手法、内容は自治体ごとに様々であるが、同市においては、東京大学総括プロジェクト機構『プラチナ社会』総括寄付講座等との連携を契機に、『スマートエコアイランド種子島構想』として、再生可能エネルギーのほか、観光・健康・医療・福祉・教育・農業分野等における取組が進みつつある。また、連携による地域活性化に向けた現状と方向性に関して『効果的な観光振興プラン、経済効果の数値化による政策提言モニターツアー…インバウンド環境の形成（2回実施 東京大、東北大、北海道大、鹿児島国際大）』と書かれている。その取り組みを下に掲げる。

前述にもあるように西之表市は東京大学を始め、全国の多数の大学とのプロジェクトを提携している。鹿児島国際大学もその一つであるが、表1で見ると2番目の項目として取り上げられている。かなり重点がおかれているように見える。今回のプロジェクトは中でも①と②にあたるもので、27年度から始まったこのCOC事業の2年目にあたる。このプロジェクトは小規模ではあるが西之表市の経済観光課がCOCとしてインバウンド対策に取り組みその完成までかかったのは今回が初めてである。

表1 種子島における大学等との交流連携の取り組み状況

NO	大学等の名称等	島の窓口	交流連携の概要
1	東京大学総長室総括プロジェクト機構 関連大学：国連大学、工学院大学、早稲田大学	西之表市役所	・プラチナ社会構想の一環として「種子島におけるスマートエコアイランドビジョン」「ニューツーリズム」等の検討 ・シンポジウム開催、種子島高等学校への出張講座
2	鹿児島国際大学 ※平成 27 年 11 月、包括連携協定を締結	西之表市役所	今後の活動予定（大学 HP より） ①中心市街地の店舗実態調査等による地域経済の活性化 ②留学生を対象とした観光需要の把握、分析。外国人観光客の誘客に向けた提言 ③種子島鉄砲まつりや種子島カップ等イベントへの協力、出演 ④高齢者支援策や特定健診受診率向上のための調査・結果分析
3	東京藝術大学 美術学部 日比野克彦教授	西之表市商工会	・学生を含めた「くろしおの芸術祭」への参加・協力
4	東京大学大学院情報学環 河口洋一郎教授	中種子町役場	・CGアートフェスティバルにおける作品出展などの協力 ※河口氏は種子島出身であり、西之表市とも交流連携活動あり
5	金沢美術工芸大学、鹿児島大学教育学部	南種子町役場	・こども宇宙芸術教室における町内 8 小学校でのワークショップ運営
6	岡山理科大学	株式会社島のタカラ	・ノコギリガザミの養殖試験への協力
7	東北大学	西之表市役所	・バイオ燃料の研究・島内実証試験支援、環境影響評価
8	京都大学、奈良先端科学技術大学院大学、熊本大学	西之表市役所	・健康・医療 ICT 研究（熱中症アラーム等）
9	神戸大学	西之表市役所	・種子島における産業連関分析
10	鹿児島大学 工学部建築学科 鯉坂 徹教授	西之表市役所	・西之表市に現存する武家屋敷跡、町屋の保存・活用への協力
11	鹿児島工業高等専門学校	西之表市商工会	・自然エネルギー発電体験プログラムを通じた学生の受入
12	鹿児島大学、鹿児島純心女子大学・短期大学、鹿児島女子短期大学、熊本学園大学、熊本保健科学大学、九州工業大学、大分大学、北九州市立大学、佐賀大学、九州大学、九州工業大学 等	種子島高等学校	・よらいきカレッジ（大学等出張講座）への参加協力
13	鹿児島大学、志學館大学、佐賀大学、熊本大学、東海大学、鹿児島純心女子大学、鹿児島女子短期大学、鹿児島医療福祉専門学校 等	種子島中央高等学校	・大学出前授業講座への参加協力

出所：高等教育機関を活用した地域活性化に関する研究報告書」より

4. 学生による種子島商店街インバウンド調査の活動報告

平成29年度の西之表市との連携により祖慶ゼミの以下の1グループは10月26日と12月26日の2回、他の2グループは12月26日の1回西之表市でインバウンド調査を行った。種子島商店街インバウンド調査を行うにあたり、三つのグループに分かれ、それぞれのグループで活動テーマを設定し、その活動テーマに沿って調査を行った。グループの内訳は1グループが3年生学生Aと2年生学生B、2グループが3年生学生CとB、3グループが2年生学生Eと3年生学生FとGである。以下、グループごとの報告書である。

4.1 西之表市商店街の銀行・コンビニ・商店街におけるインバウンドの実態についての調査

1グループによる調査である。

4.1.1 商店街の感想

- ・特にこれといって大々的にインバウンド対策がなされているわけではなかった。
- ・銀行には一般に多言語話者がいる。種子島には多言語話者はいないが、英語を各銀行員が勉強しているなど、少々努力していて解決策があるように見えた。だが、店内での案内板や言語表記等は全く整備されておらず、観光客は扱いやすくないであろうと思う。観光客が銀行へ来ることがまず皆無であることから対策はしていないらしいが、観光客を呼び込んでいく以上、これからその問題に直面するであろう。
- ・コンビニや商店街の方たちはとても温かく、意思の疎通が図りやすかった。そのため、観光客が来たときはジェスチャーやニュアンスで状況を乗り切るそうだ。
- ・商店街を歩いていて感じたが、道を歩く島民の姿があまり見られなかった。

4.1.2 改善を必要とする点

1) 銀行

- ・外から見たときに観光客が銀行であるとはわからない
 - 銀行ならではの看板を作る
- ・店内の案内板や言語表記について
 - 各項目や手順ごとに英語、中国語、韓国語なども表記する
- ・他言語話者が店内にはいない
 - 各支店に一人は配置する

2) コンビニ

- ・店内の案内板や言語表記について
 - どこにどの種類のものがあるかがわかるように、英語や中国語、韓国語などで表記する。
- ・観光客との意思の疎通
 - 各店舗の一つは、タブレット端末など常設し、アプリなどで対応する。

3) 商店街

- ・歩いている島民が少ない
 - 歩道が狭いため、歩きにくかった。商店街にある道路を一方通行にし、歩道の幅確保。島民もいない商店街に観光客も足を運ばないであろうから、島民が商店街を潤すための活動も行うべきである。

4.1.3 看板・案内板のデザイン案

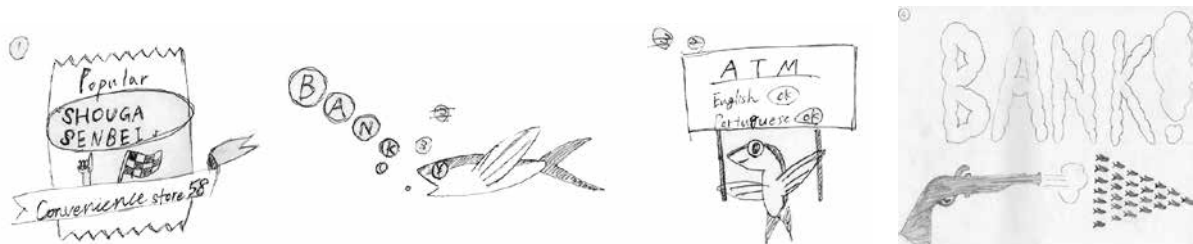


図2 銀行及びコンビニ用イラスト

出所：学生作成

4.2 商店街の外国語表記，および商店街の観光スポットの調査

2グループによる調査である。

4.2.1 商店街の感想

今回2グループは商店街の地域活性化，利便性向上のため上記の活動テーマをもとに調査を行った。特に今回は商店街における看板や案内板の外国語表記に注目した。

商店街を見て回った感想としては小さいながらもいろいろなお店があり，郵便局，銀行，レストラン，物産館は利用している人が多かったが，全体としてはお客がいない，閉まっている，というお店が多かった。また商店街では観光客をほとんど見かけずフェリー乗り場から近いのにもったいないと思った。

外国語表記に関しては看板や案内板の数が少なく，看板があっても外国語の字が小さいなどの問題点を感じた。また看板や案内板にも言えることだが，外国人観光客を受け入れる準備が全くできていないように思えた。フェリー乗り場に英語表記すらないのは早急に改善しなければならないと思う。

4.2.2 改善を必要とする点

1) パンフレットに関して

英語のパンフレットは何個かあったが，商店街を紹介しているパンフには英語版がなかった。

- ・商店街のレストラン・食堂のパンフがなかった。(地図には載っていたが営業時間やオススメメニューなど詳しいものがあるとより良いと思った。)
- ・トッピー乗り場のほうにパンフレットが全くなかった。(隣に観光案内所があるが，少しでもいいので設置した方が良いと思った。)

パンフレットに関しては，高校の英語の授業の一環で英語版のパンフレットを作製するなどすると外部委託のコストと手間を削減できると思う。(ALTもいるため，外国人目線での修正も同時に行えると思う。)

2) 案内表記に関して

- ・看板の外国語表記のフォントが小さい。(フェリー乗り場の周辺，鉄砲館，月窓亭には外国語表記の看板があったがその表記が小さいため見落としてしまう。)
- ・商店街への案内板がなかった。フェリー乗り場から近いので案内板を出すことで商店街にも寄ってくれる人が増えるのでは？
- ・トッピーやコスモスの乗り場に一切英語表記なし。(トッピーにいたってはトイレ表記すらなかった。日本人でも不便すると思う。)

船着き場の英語表記の看板設置は早急に行ったほうがよいと思った。また全体的に文字に頼りすぎているので，イラストを積極的に使用した看板を作製，設置した方が初めて訪れる人(日本人，外国人ともに)にとっては良いと思った。また今ある看板にイラストを追加するなどして，現在の看板を生かす形で行っていけば経済的負担が少なく済むと思う。

3) 観光スポットに関して

- ・ベンチアートがばらばらに設置されているので，全体に設置するのであれば数を増やす，または一カ所に集めた方がよいと感じた。
- ・空き家の壁や商店街のシャッターにアート作品を作る。(色味があるだけで閑散とした雰囲気良くなると思う。)

商店街の周辺には写真映えするスポットがあまりなかった。写真映えするスポットを一定期間だけでもいいので空地などを利用して作り，そこにスポット当てた観光ツアーを展開すると訪日外国人だけでなく国内観光客(特に若い女性)が訪れると思った。また，アニメとコラボをしていたので，アニメやキャラ

クターに関連する場所をめぐり、バスやホテルもアニメの装飾をし、お土産に非売品グッズが付く観光ツアーなどを展開するのも良いのではないかと思った。

4.2.3 看板・案内板のデザイン案

4.2.2の2)を踏まえ、次の看板・案内板のデザインを考えた(図3)。

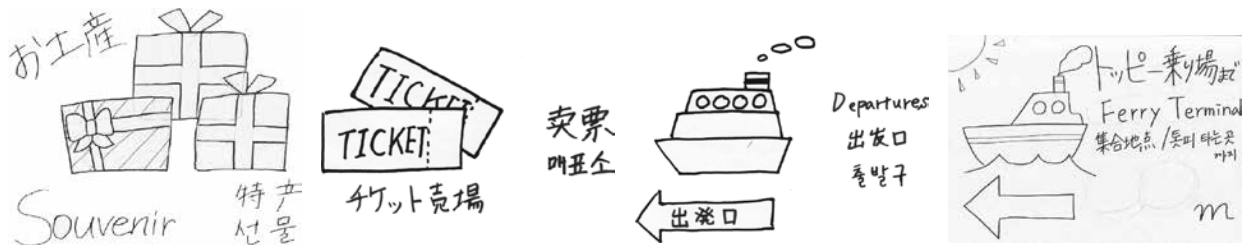


図3 観光用看板・案内板のデザイン案

出所：学生作成

4.3 商店街にある飲食店・お土産店に関する調査

4.3.1 商店街の感想

- ・外観だけでは、何の店なのかわからないところがほとんど。
- ・ほぼ日本語の看板。
- ・マップがあったが、文字が多く、パッと見ただけでは何の店があるのか伝わりづらい。
- ・営業時間の表記が必要に思う。
- ・お店の古さが目立ったのでそれを生かし、昭和レトロ風なものを目指すのも一つの手。

4.3.2 改善を必要とする点

- ・お店全体で共通のマークをつくり、案内板やマップなどで活用する。
- ・営業時間の表記を徹底する。(営業中、準備中などでも可。さらに○や×などの記号もつけるといい)
- ・お店のメニューには写真やイラストなどを使う。加えて、それぞれに番号をつければ日本語で書いてあっても分かりやすくなる。
- ・お肉の種類(ポーク、チキンなど)を書くとよい。(絵でもよい)
- ・おはしを使えない外国人もいるので、スプーンやフォークなどを用意しておく。
- ・飲食店の入り口は料理の写真を示す。
- ・コンビニやトイレには授乳室とオムツ交換シートが必要。
- ・飲食店のメニューは日本語しかないのであれば、中国語、韓国語と英語など。
- ・街の掲示板は見にくいので、小さな絵があったほうがいい。たとえばナイフ・フォークやトイレの表示など。(図4)
- ・中国のクレジットカードである、銀聯(ギンレン)を使えるようにする。

4.3.3 看板・案内板及びのデザイン案



図4 商店街の看板・案内図のデザイン案

出所：学生作成

5. 種子島西之表市商店街インバウンド対策に関する教員の報告書

以上が学生の報告書である。以下に学生の報告書とは別に西之表市に提出した筆者による報告書¹を、重複を最小限に抑え、まとめたものを下に載せる。西之表市への提出と異なるもう一つの点は市の関係者以外の人にとって馴染みのないことについては、説明を加えたことである。

鹿児島国際大学国際文化学部の祖慶ゼミでは、2017年度のゼミ活動の一環として種子島西之表市との共同プロジェクトを行うことになった。今回の報告書はその活動のしめくくりとして、これまでに西之表市での2回の調査（1度目は教員含め3人、2度目は教員含め8人）の報告である。また、これもプロジェクトの一環であるが、同大学の大学祭において同市作成の「種子島観光・特産品アンケート調査」も行った。本論文はインバウンドのみに絞り、参考までに資料として添付する。

5.1 プロジェクトの目的

このプロジェクトは西之表市との包括連携協定等に基づく連携事業で、国際化による地域振興・商店街活性化を目的に行われた。具体的には外国人のインバウンド対策で、外国人が種子島及び西之表市を訪れた際に不便に思うことを取り除くため、方策を考えることである。このインバウンド対策のきっかけは新海誠監督が2007年に「秒速5センチメートル」というアニメーション映画を製作し、その舞台が種子島だったことから、作品中に描かれた場所を多くの人が訪れたことをきっかけにしている。また、直接的なきっかけは、このアニメを実写化するという中国の監督が現れたため、多くの外国人が訪問するのであれば不備な施設等を改善しなくてはならない、とのことで、このインバウンドプロジェクトが行われた。

調査のため、西之表市商店街の全体を車で回り、中心地は徒歩で実際に店舗に立ち寄り、調査した。10月の調査は筆者も西之表市は初めてであったので、まずその概要を得ることとした。その情報を他の学生に伝え、全員で検討し、12月の調査に臨んだ。

5.2 調査地点と調査・観察の結果

10月27日の調査では、観光客がまず立ち寄るであろうと思われるインフォメーションを起点に銀行、ホテル、温泉、本屋の外観を観察し、その通り沿いや裏手の店舗を訪れ店主に話を伺った。それに先立ち、市役所の職員や市の活性化のために活動されている方々から話を伺い、また案内をしてくださった職員の方の解説もあり、店主の活性化への取り組みはすぐに理解することができた。

その取り組みは、他大学等との様々な連携プロジェクトであり、その中には各種分野での最先端の取り組みを含んでいる。資源利用や宇宙やアニメや映画に関することなどである。また、黒潮ベンチアートの

1 西之表市役所経済観光課に提出した報告書で、タイトルは「種子島西之表市商店街インバウンド対策に関する報告書」

取り組みや店舗でのアート作品の展示等によりそれが良く表れている。黒潮ベンチアートとは、近くを黒潮が流れる種子島を処々に楽しいベンチで明るくさせようという試みである。

デザイン化されたベンチは確かに町を散策する観光客にとって憩いの場で、旅を心地よいものとし、疲れを回復させ、次の店を回ろうという気持ちにさせるものである。また、大会に出展されたアートが飾られた店舗を遠くの地からわざわざ見るためにやって来る人もいると聞いた。それも、西之表市を訪れる動機になるであろう。

しかしながら、このような取り組みも打ち消されてしまうほど、全体でみると観光客誘致の取り組みの効果が薄く、大変にもったいないという印象を受けた。それは、観光と言う観点より根本的な部分にあるのであろう。全国的にも商店街が活気と言う点で困難を覚えている今日であるが、まず、全体に活気があまり感じられない。郊外に人口が流出していることも原因であろうが、人の往来が少なく、それに伴い商店の活発な営業が見られない。調査地域以外にはにぎやかな地域もあるのであろうが、訪問した地域は寂しい印象があった。

12月26日の調査場所は同地域であった。この時は学生の調査が中心であったので、教員は全体を概観することにした。前回の調査と合わせて以下に気づいた点を記す。

- 1) 種子島全体の取り組みを商店街と結びつける取り組みが今以上に求められる。上記のように西之表市が島全体で行っていることは最先端の素晴らしいことが多くあるが、商店街と結びついていないのがほとんどのように見られる。一部、アートやアニメの取り組みが商店街にもあるが、数が少ない。商店街にも小さなコーナーからでもその取り組みが有ると良いのではないかと思う。
- 2) 人目に付くようなインテリアや飾り付けを行うと良いのではないだろうか。現在のままでは良い商品があっても気づかないことも多いし、店に立ち寄ろうという気が起きないところも多い。
- 3) インバウンドも良いが、観光客一般の人にとっても必要なインフラ等の充実に努める必要があると思われる。例えば、トイレ等の設備を必要だと思われるところには設置し、しかも利用しやすく、ある程度心地良いものである必要がある。また、妊婦や乳児を抱える母親に対する対策も必要であろう。
- 4) ホテルのメニューも土地のものだけでなく、幅広い客の嗜好にも対応できることが望ましい。例えば、バイキングでは魚料理だけでなく、肉の料理も加える等、経済的にも多くそろえるのは厳しいとは思いますが、多少増やして欲しい。
- 5) 宗教的に豚肉を食べることができない回教徒やベジタリアンにも対応可能であるかも確認したいところである。(今回は尋ねることはできなかったが)
- 6) ホテルのフロントで外国人観光客のことを訪ねたところ、ほとんど外国の宿泊者はいないとのことであった。外国の客は民泊を利用することが多いからとのことであったが、郊外のイベントとの提携などで呼び込む工夫が必要と思われる。
- 7) 予算が乏しく、大規模な取り組みができないと思うが、その場合でも今ある資源を利用する工夫が必要であろう。多少の統一感のあるレトロの街並み等、何か特徴のある街並みや店舗にする試みが求められる。

以上が、インバウンド調査の報告書である。1月の末の提出であった。その間に、種子島観光に関する調査を大学祭の期間中に大学で行ったが、その調査の結果は他の機会に報告することにし、本稿では割愛する。

6. 追加作業

上記報告書以外にインバウンド対策の成果品が必要であるとのことで、案内板の設置を目指すことに

なった。調査前にインバウンド対策として必要であろうと想定していたものの一つに多言語案内板があったからであるが、実際に現地で調査したところ、多言語での表示よりイラストの方が効果的ではないかとの判断し、ゼミとしては前述のレポートを提出していた。しかしながら、西之表市の要望もあり、案内板も試みることになり、原案に翻訳の追加及び修正をしたものが次にあげるイラストである（図5）。設置場所はフェリー乗り場での案内板を想定した。



図5 追加修正のイラストの例
出所：学生作成

以上が案内板のためのアイデアであった。次の項目で、これまでの提案により作成された成果物を紹介する。

7. プロジェクトの成果

以下の写真（図6～12）が2月中旬までに提出した作品をもとに西之表市によって作成された作品である。予算の都合により案内板の作成はできなかったということで、案内のパンフレットになったそうである。「外観だけでは、何の店なのかわからないところがほとんど」「ほぼ日本語の看板」「マップがあったが、文字が多く、パッと見ただけでは何の店があるのか伝わりづらい」等の学生の報告をもとに作成されている。マークに関しても報告書に載せたイラストも参考にしてあるようだ。「西町案内パンフレット（図6）」と「東町案内パンフレット（図7）」はこれまでのパンフレットもそうであったが、両面のように思われる。西之表市は東町と西町で二手に大きく分かれている。インバウンドマップ（図8・9）はパンフレットを拡大したもので、これを見ると今まで何の店かわからなかったことや、Wi-Fi等が利用できるか等の情報が一目でわかるようになっている。案内板の代わりに作成したものはポスター（図10）と街灯に掲げたタペストリー（図11）である。このように楽しくもあり、利便性もあるインバウンド対策になる品ができあがったことは喜ばしいことである。これは、外国人のためだけではなく、これまで不便に思っていた日本人のためにも役にたつものである。



図6 西町案内パンフレット
出所：西之表市



図7 東町案内パンフレット
出所：西之表市



図8 インバウンドマップ（上図3の表示図案）



図9 インバウンドマップ（商店の拡大図）



図10 ポスター
出所：西之表市



図11 景観統一（インバウンド）
タペストリー



図12 商店での表示

8. 結論

今回のプロジェクトの成果として学生側が得られたことは以下の通りである。

- 1) 学生にとって社会で実際に働く人々の考えや行動を知る良い機会となった。
- 2) 学生にとってプロジェクトを通してしか得られないプロジェクト立ち上げや経緯、プロジェクトに関する失敗談や成功例等を詳しく知ることができた。

自治体側が得られたことは以下の通りだと思われる。

- 1) 同じ構成員だけだと新規の企画が浮かばないが、学生の予備知識無しで思いつく企画が自治体に新鮮なものを受け止められたのではないかと思われる。
- 2) 経済的なコストのことを考えると、学生に仕事を頼むことはかなりの節約になると思われる。

9. 終わりに

学生と自治体との間で日程の調整が難しいところもあったが、1年間のプロジェクトとしては多くのことがなされたと思う。また、学生にとっては社会と直接繋がっていない現実社会を短時間で深く学ぶことができた。また、前述のようにお互いの長所を伸ばすことができたのは良かった。これからも、このようなプロジェクトが続くことを期待する。

参考文献・資料

1. 鹿児島県西之表市 (2016)「高等教育機関を活用した地域活性化に関する研究報告書」
2. 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室 (2017)「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)事業説明会資料」